

大学間連携による新しい学びの形態に関する研究

～関西大学総合情報学部と日本福祉大学福祉経営学部の実践から～

Study of new learning environment by cooperation of universities

山本良太*

関西大学総合情報学研究科

影戸誠**

日本福祉大学

久保田賢一***

関西大学

*Graduate School of Informatics, Kansai University、**Nihon Fukushi University、***Kansai University

要約：文部科学省は国公立大学に対して、継続的に教育改革の推進を支援する取り組みを行っている。それを受けて各大学は多様な取り組みを行っている。そのような中、関西大学と日本福祉大学では、これまでそれぞれが行ってきた実践を連携して取り組む協働実践を開始した。本研究はその詳細と、そこでの学生の学びに着目したものである。

キーワード：大学間協働、moodle、国際協力プロジェクト

1. 研究の背景

文部科学省は、高等教育の質向上と国際的な競争力を高めるために、「現代 GP」や、「特色 GP」等、競争的な環境に大学を置き、支援するようになった。

大学の特色ある実践が求められる中、関西大学総合情報学部(以下、関西大学)と、日本福祉大学福祉経営学部(以下、日本福祉大学)はそれぞれ独自に、国際協力プロジェクトを立ち上げ、学生の実践的な学びを推進してきた。この実践をさらに充実させるために2007年度よりプロジェクトを協働で実施し、新たな取り組みを始めた。

関西大学では、過去2年にわたり、フィリピンで村落開発プロジェクトを実施してきた。このプロジェクトの目的は、農村部の高校での情報教育の支援である。また、参加した学生が実践を通して、英語力、運営力を身に付けることである。プロジェクトは関西大学学生と現地の教員と協働して行い、ディスカッションをし、現地のニーズを取り入れながら進めている。

一方、日本福祉大学では2006年度より学生の「フィリピン研修」の一環として、同じ農村部の高校に中古パソコンを寄贈し、情報教育の支援を開始した。この活動では、農村部のニーズに合った支援を行う事を目指し、まず現地のニーズ把握から始めた。特に、福祉の視点から支援を考えることを目指した。2007年度は定期的に訪問し、現地で学生が活動することを目指している。

これまで各大学で独自に行ってきた実践であるが、2007年度は、両大学が連携することで、さらに充実したプロジェクトを展開できる

のではないかと考えた。両大学の学生の専門領域が違うことで、互いに違う視点で議論をすることができ、それが多様な視点を生かすことにつながるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学連携により協働プロジェクトを実施する中で、参加した学生がどのように学んでいくかそのプロセスを明らかにすることである。

他大学の学生同士がどのように協調的な関係を持ちながらプロジェクトを推進することができるか、そのプロセスの中でどのように学ぶことができるかを明らかにし、新しい大学教育の方法を提案する事を目指している。

3. 研究方法と対象

研究方法はインタビューとその分析である。関西大学と日本福祉大学の学生それぞれに対して、半構造化インタビューを行い、そのデータをグラウンデッドセオリーアプローチに基づいて分析する。

理論的サンプリングに基づき、最初の対象者は活動のリーダー的な学生に対してインタビューを実施する。

4. 実践の概要

関西大学と日本福祉大学は2006年から、フィリピン・ミンダナオ島・サンイシドロという村落において、国際協力プロジェクトを実施してきた。2007年度は、それぞれの大学が行っている活動の質向上、そして他分野の学生と協働して展開していく事を目指した。

協働の方法として、LMS (Learning Management System) を利用し、ウェブ上のフォーラムで互いの活動を情報共有し、議論を深めることにした。加えて、テレビ会議を活用し、同期対面方の議論も平行して行った。

本研究ではこの協働実践に着目し、そこでの学生の学びを明らかにする。

4-1. 関西大学の実践

関西大学では2006年より「フィリピン村落部におけるICTを活用した村落開発」プロジェクトを立ち上げ、現地高校を対象とし、ICT教育の普及を目的とした活動を行ってきた。活動の主体は関西大学の大学院生2名と、学部生7名で、活動を行っている。

2007年8月の訪問では、高校において教員のコンピュータスキル向上のための教員研修と、今後の村落開発に向けた現状調査を行う。

4-2. 日福大の実践

日本福祉大学では2006年度に、「フィリピン研修」を行い、その研修活動の一部としてサンイシドロ高校でのICT教育支援と、現地NGO「House of Joy」の語学教育支援を行ってきた。この活動には、日本福祉大学が毎年開催しているWorld Youth Meeting(以下、WYM)で中心となったメンバーが有志で参加している。WYMとは、日本福祉大学の学部生が中心となり開催する異文化コミュニケーションの国際大会で、毎年数カ国から大学や高校を招聘し、英語での発表を行っている。

日本福祉大学の実践は2006年度から始まったものであり、まだ具体的な活動方針は決まっていないが、2007年度以降も活動を継続していく予定である。

4-3. 協働実践

関西大学と日本福祉大学との協働実践は2007年5月に始まり、Web上に「moodle」と呼ばれるLMSを立ち上げ、そこでオンライン上のやりとりをしている。加えて対面での交流会を持ち、どのような支援が必要であるか、議論を行っている。

〔moodle〕

「moodle」とはLMSの一つで、モジュールの追加によりフォーラムなど様々なコミュニケーションツールを総合的に扱うことができる。主な使用方法としてフォーラム機能を使い、情報共有、意見交換を行っている。

〔交流会〕

交流会は2007年7月と、8月に行い、対面で親交を深めた。第一回の交流会では、協働プロジェクトを始めるためのキックオフミーティングとして、二回目は今後の取り組みに対しての議論を深めた。今後も活動報告会など、定期的な対面での交流会を持つことを予定している。

〔WYM〕

2007年8月3、4日に日本福祉大学美浜キャンパスで行われたWYMにおいて、関西大学と日本福祉大学の参加学生が共同で発表を行った。発表では、それぞれがこれまで行ってきた活動の紹介と、今後の協働実践の展望について述べた。

5. 分析の結果

本研究は現在進行中であり、分析は終了していない。詳細については当日報告する。

6. 今後の課題

今回の研究では協働プロジェクトに参加する学生のインタビューを行うが、今後、プロジェクトの活動観察記録、プロジェクト評価などの研究方法を取り入れ、トライアングレーションをしていく必要があるだろう。

また本協働プロジェクトはまだ開始したばかりであり、今後両校の学生がさらに活動を充実させるための支援にはどのようなものがあるか、研究を深めていく必要があるだろう。

参考文献

- ・ 文部科学省 『大学における教育内容・方法の改善等について』
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/dai_gaku/index.htm
- ・ 戈木クレイグヒル滋子 2005 『質的研究法ゼミナール—グラウンデッドセオリアプローチを学ぶ—』

付記

本研究は、科研費基盤研究(B)「コミュニケーションを重視したデジタル学習環境に関する実証的研究」(代表：久保田賢一)課題番号1730277より助成を受けている。